

( 続紙 1 )

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	北浦 寛之
論文題目	テレビ浸透期における日本映画の変革 — 産業・テクノロジー・内容		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、1950年代から70年代にかけての日本映画の実情を、同時代急速に普及していくテレビとの関係を踏まえて、多角的に考察した映画学的研究である。1950年代は、日本の映画界が過去最高の景気を示し、いわゆる「黄金期」であったのに対し、60年代は、観客数ならびに映画館数が減少の一途を辿り、「斜陽期」と位置づけられている。さらに1970年代になると、大映、日活といった老舗の映画会社が相次いで経営破綻へと追い込まれるのであり、映画産業の危機が自明のものとなっていく。こうして同時代、日本映画界は繁栄から衰退へと、大きな転落を強いられるのだが、そこには当時からテレビの普及が関係していると見なされてきた。映画観客の減少とテレビの急速な普及は、どちらも1959年に始まるのであり、それゆえ、両者の盛衰を因果関係的に結び付けて語ることが常識とされてきた。本論文は、こうした統計的な判断のもとに表面的にしか語られてこなかった両者の関係性について再考し、また、看過されてきた日本映画の転落の内実へと迫るものである。</p> <p>具体的には、全3部5章のもと、以下のような観点から考察をおこなった。まず第Ⅰ部では、映画産業の繁栄から衰退への流れを整理し、その内実を探ることを目的とした。なかでもその第1章においては映画興行に生じた問題とそれに対する興行者たちの対応について検証した。景気の状態を表す指標としてしばしば引用されるのが、前述の観客数や映画館数であるが、それらは、映画興行と密接に関係する統計データでもある。ここでは、1950年代の日本映画の黄金期に起こった、興行者同士の激しい対立や、60年代の斜陽期でありながらも、大都市の一部の劇場が繁栄した背景など、統計データでは読み取れない、斯界の実情を明らかにした。</p> <p>次いで第Ⅰ部第2章では、1960年代以降、観客数の減少に苦しむ大手映画会社が採った動員回復のための戦略について考察をおこなった。同時代、各社とも、映画の収入減を補うため、ボーリング場やホテルの経営など、映画以外の事業を積極的に展開していったことはよく知られている。そうした多角経営が各社で推進される中、それでも彼らが映画事業の再建にどのように取り組んだのかを、宣伝強化や、大都市中心の配給など、具体的な事例を挙げて詳述した。</p> <p>第Ⅱ部では、映画産業がテレビ対策として導入したワイドスクリーン映画を取り扱った。世界中でさまざまな規格が開発されたワイドスクリーン映画のなかでも、日本をはじめ各国で当時圧倒的な支持を集めたのがスコープ映画と呼ばれるものであった。1957年に登場したスコープ映画は、それまでの画面サイズよりも約1.7倍、スクリーンが横に拡大したもので、テレビとの違いを強調するために生み出された。それはテレビの小さな画面では体験できない迫力と「現実感」をもたらすことが期待され、テレビ産業に対抗する最大の技術革新になりうると考えられた。第Ⅱ部第1章では、こうして商業的要請から導入されたスコープ映画が映画製作に与えた影響についての考察を、撮影手法の変化に注目しておこなった。監督たちが当初、拡大した空間の処理に戸惑いを覚えていたことを当時の言説から明らかにする一方、それでもその空</p>			

間を生かして、独創的な撮影手法を実践する者がいたことを、精緻な映像分析と共に提示して見せた。続いて第Ⅱ部第2章では、前章での議論を踏まえて、奥行きが欠如というスコープ映画が抱える技術的問題を取り上げ、加藤泰という「縦の構図」で評判を呼んだ監督がその問題をどう克服し、奥行きを利用した映画演出を実践したのかを、彼の作品『幕末残酷物語』（1964年）を採り上げて、テキスト分析により明らかにした。

第Ⅲ部では、同時代の映画とテレビの作品を比較することで、映画がテレビから受けた作品の内容面における影響を確認した。なかでもその第1章では、日本映画の草創期から国民に親しまれてきた時代劇に焦点を絞った分析をおこなった。1960年代に入り、映画産業の斜陽にあわせて、それまで隆盛を誇っていた時代劇映画は衰退していく。とはいえ、時代劇ジャンルそのものの人気は廃れたわけではない。同時代、テレビ時代劇は好評を博していたのである。こうした背景を踏まえて、本章では、1960年代以降の時代劇映画の展開を、ヒーローたちの身体表象に注目し、テレビ時代劇との比較を通して分析していった。

結論では以上のような考察から、テレビ浸透期の日本映画界においては、映画の製作、配給、興行とあらゆる段階で「変革」が遂行されていったことを強調し、さらにその「変革」が現代の日本映画を支える基盤になっていることを指摘した。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は1950年代から70年代にいたる日本映画史の繁栄期から衰退期への変遷プロセスを、同時代の新興映像メディアムであるテレビとの関係を踏まえて包括的に論じた最初の研究で、日本映画史ならびに映像メディア史的に大変意義のある成果を上げている。

大衆娯楽として人気絶頂にあった映画産業が、テレビ産業の普及によって、一転、かつてない危機に直面する時代は、日本映画史の大きな分岐点であり、それゆえ決して看過できないが、にもかかわらず、その一連の経緯は従来、表面的にしか分析されてこなかった。統計上、1959年より映画観客の減少が始まり、同時にテレビの台数が急増することから、多くの論者が、そうした統計的資料を引用しては、映画の衰退をテレビの普及と結び付けて説明することに終始してきたのである。本論文は、そうした統計論的視点による単純素朴なメディア産業論に異議を唱え、日本映画の転落の要因となったテレビ以外の諸問題を、当時の社会状況や国民生活の変遷などに照らして考察し、こうした諸問題に対して映画産業側が随時採用した対応策を詳しく検証し(第I部)、従来は不可視であった映画史の一側面を鮮明に浮かび上がらせている。

無論、その一方で、テレビの存在も軽視しているわけではない。映画産業界がテレビ産業から受けた直接的／間接的影響についても、先行研究の不備を補完する十全たる考察がなされている。それが第II部第1章における、映画館のスクリーンの拡大とそれともなう撮影・演出の変化に関する精緻な考察である。

映画産業界はテレビ産業との葛藤ゆえに、テレビの小さな画面との差異化を図り、1957年に従来の縦横比1:1.37のスタンダード画面を横に大きく拡大した、1:2.35の「スコープ・サイズ映画」(当時のワイドスクリーン映画様式の主流)を世に送り出すのであり、それによりテレビでは味わえない迫力と「現実感」を大衆に伝えようとした。こうした経緯は、日本映画史について書かれたどの文献にも必ず記されていることだが、本論文は当然それについてもさらに綿密な調査を行い、精緻な映像分析により、スクリーンの拡大ともなう強いられた演出上の変化を考察している。たとえば従来の研究では、「スコープ・サイズ映画」時代、スクリーンの拡大により、かつては数ショットに分解されなければ表現できなかったものがワン・ショット内で表現できるようになり、ワン・ショットの平均持続時間(ASL [Average Shot Length])が長くなったと記述されていた。これに対して本論文では、数百本の日本映画を対象にASLのリサーチを行い、そうした「定説」が不正確であることを証明している。また画面の大幅な拡大により、監督たちの構図に対するそれまでの演出感覚に狂いが生じたことを当時の言説から明らかにし、その上で、多数の「スコープ・サイズ映画」にテキスト分析を施し、以後、この映画様式の特徴を活かした新しい構図の規範が生まれたことを検証している。以上のような徹底したリサーチならびに優れた映像分析は本論文全体に認めることができ、十全たる研究成果の証となっている。

また、この商業的／産業的目的から誕生した「スコープ・サイズ映画」が、「奥行き」を利用した映画演出の表象美学にどれほど貢献したのかを加藤泰監督の作品を通して考察している点も非常に興味深い（第Ⅱ部第2章）。というのも「スコープ・サイズ映画」では、その技術的欠陥から焦点深度が不十分で、それゆえ焦点が合う縦（奥行き）の空間の範囲は限られており、奥行きを使つての空間表象と俳優演出は困難だと見なされてきたからである。しかし本論文では、日本映画史上きわめて独創的な視聴覚表象で知られる映画監督加藤泰が、自作『幕末残酷物語』（1964年）で、奥行きの問題をいかなる演出と撮影技法によって克服したのかを、精密なテキスト分析により解明している。本作は従来、身体の切断や過度の血流などを売りにした「残酷時代劇」の範疇で語られてきており、また興行的に成功しなかったこともあって、正当な評価がなされてこなかった。しかし本論文では、加藤泰が焦点深度の問題に関係なく、綿密に設計されたセットを巧みに利用して、横長の画面内に巧みに奥行きを作り出し、さらにはその奥行きのある精妙な画面構成により、登場人物の情動（emotion）を見事に掘り下げたことを、一つひとつのショットを精緻に分析することで考察している。これによりテレビ産業との攻防から誕生し、制作システムにはいくつかの障害をもたらした「スコープ・サイズ映画」であっても、新たな映画の想像力／創造力の生成に大きく貢献したことが立証されるのである。

もっとも、本論文にもさらなる論考の発展を期待する箇所がある。第Ⅲ部では時代劇映画とテレビ時代劇の作品比較を通して、その影響関係を探っており、その試みと成果は特筆すべきであるが、それでも今後、そこで果たされなかったテレビとは異なる映画の独自性の探究を行なえば、リサーチはさらに有意義なものになると考えられる。

とはいえ、本論文は、人間の文化的・社会的活動へ多大な影響を及ぼしてきた映画とテレビの歴史にいくつもの重大な発見を付け加えるものであり、共生人間学専攻、人間社会論講座の理念に適う研究である。よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文としての価値を有するものと判定される。また、平成25年1月25日、論文内容とそれに関連する事項に関して口頭試問を行った結果、本論文を合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降